

家族みんなで食べることの幸せ

富津市立大佐和中学校 三年 玉川みすず

我が家の二階の窓から見える景色は絶景だ。

見わたす限り一面田んぼが広がっている。春

夏秋冬とその季節ごとの美しさがある。稲が

風に揺れる音、蛙の大合唱など耳も楽しませ

てくれる。私の家では祖父が一人でお米を作

っている。祖父も七十八歳と高齢なので、若

かった頃よりも自分で作る田んぼの数を減ら

している。家から少し離れた場所にある田ん

ぼは知り合いの方に委託したり、自分で作っ

ている田んぼでも稲刈りだけ農協さんにお願

いしている。近所でも私の家と同じように祖

父と同年代の高齢の方が米作りをしたり、別

の人に委託している家が多い。よく祖父が、

「三つ先輩の〇〇さんが頑張っているから、

負けちゃいられないな。俺も頑張ろう。」

と言っている。そうやって自分を奮い立たせ

て米作りを続けてくれている。もちろん祖父

のお米はとてもおいしい。炊き立てのご飯は

格別だ。甘くて、光って、水分がたっぷりでおかずもいらなくらいだ。

昨年、私は、夏休みに入ると同時に病気で入院することになった。入院期間は六月ととても長くて辛いものだった。どうして病気になっってしまったのだろう、何か病気になるような原因があったのだろうかと自分を責め、自分の体はこれから一体どうなってしまったのだろうという絶望感でいっぱいだった。家族と会えない、友達に会えない。学校へ行

けない寂しさと焦りと不安。部活もできないもどかしさ。生活の全てが奪われてしまい、体だけでなく心も疲れてしまった。

入院中の病院食もなかなか手強いものだった。薬の影響で食欲がなくなっただけのことではもちろんあったが、もう一つ大きな理由があった。それは、食事は家族六人で賑やかに食べるのが当たり前になっっていたからだ。その日の学校での出来事を話したり、姉や妹とじゃんけんをして、勝った人から量の多いものを選ぶ

のも恒例だ。そんな私にとって、カーテンに
囲まれた殺風景な病室で一人ぼっちで食べる
食事には抵抗があった。誰とも話をするこ
なく、ただ黙々と食べ、食器の音ばかり響い
ていた。しだいに病院食は喉を通らなくなっ
てしまった。病院食を残す私を心配して、栄
養士さんが病室まで来て、私の気持ちを丁寧
に聞いてくれた。そして、メニューを食べやす
い麺類などに変更したり、栄養不足を心配
して、栄養補助食品を追加してくれたことも
あった。父と母は、私が一人で食事の時間を
過ごさないように、昼食や夕食の時間に合
せて面会に来てくれ、たわいもない話をしな
がら食事をした。時間が合わない時は、ビデ
オ通話で家族と会話をしながら食事をした。
画面越しでも家族の顔が見え、声が聞こえる
と、食べられる量も少し増えた。
また、母が面会に来る時は、祖父の畑で採
れたトマトや家でのぎった塩おにぎりを持っ
てきてもらった。病室のベッドの上で食べた

トマトと塩おにぎりのおいしさは今でも忘れられない。誰かと一緒に食べることのありがたさ、作ってくれた祖父を通して味わう家族のあたたかさを再確認することができた。

お盆を過ぎ、そろそろ稲刈りの時期を迎える。黄金色の稲穂が刈り入れを待ち構えているように見える。祖父のおかげで、今年もおいしいお米が食べられることに感謝だ。昨年、入院して、新米を初めて食べる日に立ち会えなかったけれど、今年は家族六人そろって新米を食べられそうだ。